

# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1553

会議に際しては、たとえ徳がなくとも、巧みに言いまくる饒舌無学の輩が有力となるであらう。  
（『テラガーター』）

△解説▽ある仏弟子が語ったとされることば。多くの修行者のなかには、こうしたひとたちがいたのであろう。その現状を嘆いたのであろうが、まったく現在においても変わらないようだ。たとえそうであっても、その中でも教えを実践する自分を見失ってはならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 3. 19 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1552

或る人々は、そのように、剃髪し、重衣をまとっているが、修行に勤めないで、利得や供養を得ることにうつつをぬかし、尊敬されることだけを求めている。  
（『テラガーター』）

△解説▽仏教教団が大きくなり、よくない人も増えた時、ある弟子が現状を嘆いた言葉。最初の求道心はどこへいったか。外面だけを飾り立て、人目を気にする。本来の心の修養はどこへいったのか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 3. 18 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1555

現実の智慧という絶対的立場が、現象的世俗的立場のうちに開顕してきたとき「慈悲」となるのである。  
（中村元）

△解説▽すべては相互に縁によって成立している。それが真実のあり方で、それを知るのが智慧である。智慧の立場からは、自己と他人は対立するものではない。ゆえに自分を大切にすることは他人を大切にすることでもある。智慧は必然的に慈しみの心となって現れるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 3. 21 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1554

あなたが「わたしはすべてを認めない」という見解をもっているのなら、あなたはその見解自身も認めないのか。  
（釈迦）

△解説▽見解にとらわれてはいけない。世間の論説に迷わされてはいけない。悩み苦しみをもたらすからある修行者が「すべてを認めない」という見解に固執していた。それに対して釈迦は彼の主張の矛盾を指摘し、凝り固まった心に気づかせ、正しく見るきっかけを与えた。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 3. 20 中村元記念館協力



# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1557

悪いことをしても、それが善くないことであつたと気づき、反省し、過ちを悔い改め、善いことをしつづけていくなら、罪は日ごとに消滅し、ついには道を得ることが出来る。

（『四十二章経』）

△解説▽いちど間違いを犯してもそれで終わりではない。大切なのは、過ちに気づき、反省し、悔い改め、その上で、自らの心を転換できるかどうか。それで、人生は大きく変わっていく。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.23 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1556

大慈悲をば室と為し、柔和忍辱を衣とし、諸法の空を座と為して、此に処りて為に法を説け。

（『往生要集』）

△解説▽わたしが臥すところは慈しみの心（大いなる慈悲心）であり、衣は忍ぶ穏やかさである。もろもろの実相を知つてくだわることのない境地にあつて、その境地にありながら人々のために教えを説くのがよい。それこそ大なる慈悲であるといふ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.22 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1559

人が精神的に強いかどうかは、災難にあうことによつてわかる。それも長い時間がたつてからわかるのであり、そうであればわからない。

（釈迦）

△解説▽さらに、注意深く、洞察力をもつていなくてはわからないと述べる。同様に、戒めを守つていふことは共に住むことで、清廉であることは交渉（取引）すること、智慧があるかどうかは談話してみてわかつてくると説明している。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.25 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1558

世の中で借金の残り、火の残り、敵の残りは次第に大きくなる、それらを残さないようにするがよい。（『ダンマニーティ』）

△解説▽少ないから、小さいからといって放置すると危険なものがある。気づかぬうちにどんどん大きくなり自らが破滅する。私たちの苦しみのもとである煩惱、煩惱のもとになる欲望もそうだろう。放つておくと大きくなり苦しみを生むから要注意。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.24 中村元記念館協力



# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

## 中村元 慈しみの心 No.1561

我は良医の病を知って薬を説くが如し、服と不服とは医の咎に非ざるなり。（『仏遺教経』）

△解説▽すぐれた医者が薬を用意するかのように、仏は相手の能力や立場に応じて適切にアドバイスをしている。ただ、それを実践して自分のものにするかは、目の前にある薬を飲むかどうかと同じ。飲まないのは医者のお咎ではないと注意する。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.27 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1560

当に聞思修の慧を以て而も自ら増益すべし。（『仏遺教経』）

△解説▽「聞思修」とは、智慧を修行の過程において三つにわけて説明したもの。つまり、教えを聞いて、その意味を考えながら自らの生活への適応を思惟し、実践修道すること。それを繰り返し返して智慧は磨かれ、煩惱を克服し、老病死の苦しみを乗り越える力となる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.26 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1563

古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ。（松尾芭蕉）

△解説▽たとえば聖者や経典によって自らの生き方を学ぶとき、それらが何を探求し、何を伝えようとしたのかを追うべきだ。素晴らしいと感じても表面的な模倣ではなく、なぜ、そのような道を歩んだかを考える。形だけではなく、その精神を生かしたとき、自分も生かされるのではないか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.29 中村元記念館協力

## 中村元 慈しみの心 No.1562

夫婦ゲンカをしようと思つたら、まず合掌してからはじめなされ。（沢木興道）

△解説▽実際に手を合わせてから夫婦ゲンカをしている人は見たことはないが、たしかに、そうすればけんかにならないだろう。感情的なぶつかり合いではなく、より建設的な方向性が見つかるとも思えない。なぜなら、この場合、お互いが怒りの感情に気づいているから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.28 中村元記念館協力



# 中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1565

悪人でも悪が熟さない限り、善い目を見る。しかし悪が熟するときには、悪い目を見る。善人でも善が熟さない限り、悪い目を見る。しかし、その善が熟すると、善い目を見る。  
（『ジャーナル』）

△解説▽悪いことをしても幸せそうにしている人もいる。善いことをしても不幸を味わっている人もいる。なぜだろうか。しかし、人の行為というのは、それが熟するとき必ず結果をもたらす。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.31 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1564

若し全肯すれば、則ち先師に辜負す。  
（洞山良价）

△解説▽もしも師の説くところを全面的に認めるというだけなら、それはかえって師にそむくことになるという。「辜負」とは「そむくこと」の意。師の「教えというもの」を全面的に認めるだけなら、それは師の教えを自分のなかに生かしていないことになる。それは教えを受けた師に対する裏切りでもある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.3.30 中村元記念館協力